

クマゲラの生息を確認する方法

雲野 明

はじめに

クマゲラ(写真-1)は北海道の森林に生息する大型のキツツキで、北海道レッドリストで絶滅危惧種に指定されています。国内の主要な生息地は北海道で、森林内にある大木に自ら穴を掘って営巣するため、北海道の森林を代表する鳥の1種といえるでしょう。生息環境として比較的まとまった森林が必要であり、営巣やねぐら(夜の休息場所)に太い通直な樹木を利用することから、森林環境の指標種や保全上のシンボリックな種としての可能性があります。

クマゲラは絶滅危惧種に指定され、森林施業においても配慮が求められますが、林業関係者などから「どこにでもいるよ」といったお話しをお聞きます。私自身も森林に生息する同じ絶滅危惧種であるクマタカやオオタカといった猛禽類よりも見かけることが多いと感じています。では、実際のどのくらいの頻度で見ることができるのでしょうか？ また、どうすればその生息を確認することができるのでしょうか？ ここでは、まずクマゲラの行動圏の大きさについてこれまでの調査事例を紹介し、次に生息地で行った調査から発見率について紹介します。また、クマゲラを直接見たり、声が聞こえたりしなくても生息情報が得られる間接的方法についても紹介します。最後に森林施業とクマゲラの保全について考えます。



写真-1 クマゲラのメス

クマゲラの行動圏

クマゲラのつがいは大きな環境変化などがなければ、基本的に1年中同じ地域に生息しています。しかし、つがいで一緒に行動していることは少なく、行動圏の中を別々に移動しているようです。季節によりその行動圏の大きさは変化します。おおまかにいえば繁殖期に狭く、非繁殖期(特に冬期)に広がります。ヨーロッパでは生息環境により行動圏のサイズが異なることが知られていて、一般に好適な環境ではそのサイズは小さく、生息環境のあまり良くない場所では大きくなります。これまでの調査では行動圏の大きさは、富良野では約300ha(繁殖期のみ)、東北では1000~3000haと報告されています。比較的行動圏が狭い富良野の例でも行動圏の形を円形と仮定すると、半径約1kmの円に相当することから、クマゲラは広い範囲を飛び回っていることがわかります。

ある生息地での発見率

では、実際にクマゲラの生息地で生息調査をすると、どのくらいの割合でクマゲラを発見できるのでしょうか？ 一例をご紹介します。調査はクマゲラの生息が毎年確認されている空知地方の生息地で行いました。調査地内にある1周約4.9kmの散策路を約2時間かけてゆっくり歩きながら、冬にはスキーで移動し、クマゲラを探しました。2008年4月から2011年3月まで、毎月10~23回、行いました。その結果、クマゲラを発見した回数の割合は、図-1のようにほとんどの月で4割以下でした。特に1月、5月、7月~9月は平均で2割以下と低くなりました。生息地といえども簡単に見つけることができませんでした。

なお、クマゲラのおおまかな1年の生活サイクルは以下のとおりです。3月になると繁殖準備のため、つがいで鳴きかわしが始まります。4月から5月に巣場所となる樹洞（樹木の幹にあいた穴）を決めて、5月に卵を産み、ヒナを育てます。6月から7月に巣からヒナは巣立ち、その後は秋まで家族と巣周辺で過ごします。生活サイクルと発見率の関係を比べると、卵を産んで卵を暖めている時期（5月）や巣立ち後の家族で生活している時期（6～9月）の発見率が低くなりました。

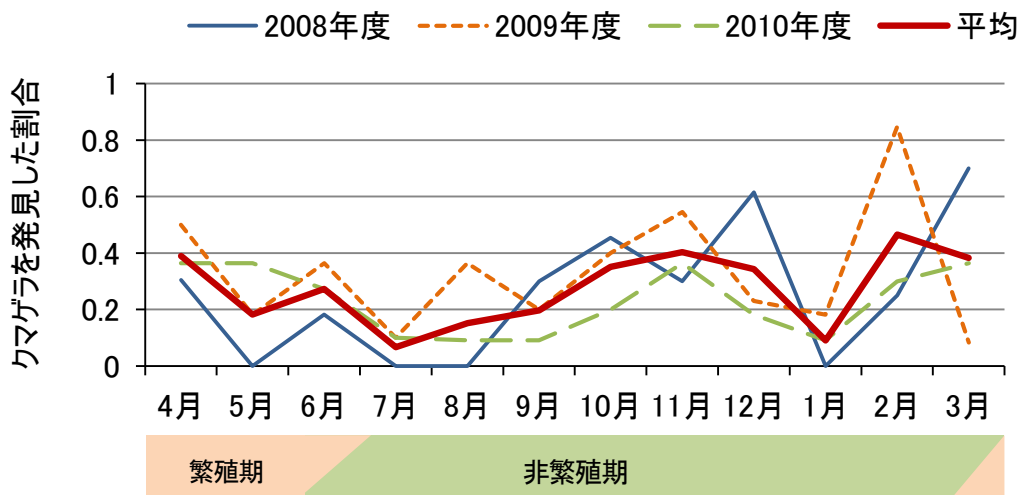


図-1 クマゲラの発見割合の推移と1年の生活サイクル

この調査では、クマゲラの確認は鳴き声と姿で行いました。先ほどのデータを用いて、発見時に鳴き声で見つけた割合を示すと図-2 のようになります。ほとんどの月で姿よりも鳴き声でクマゲラが発見されることがわかります。一般に森林で鳥の調査を行う場合、樹木に葉のある季節は特に見通しが利かないので、鳴き声による確認が重要になります。ほかの鳥と同様に、クマゲラを探すには鳴き声を覚える必要があります。

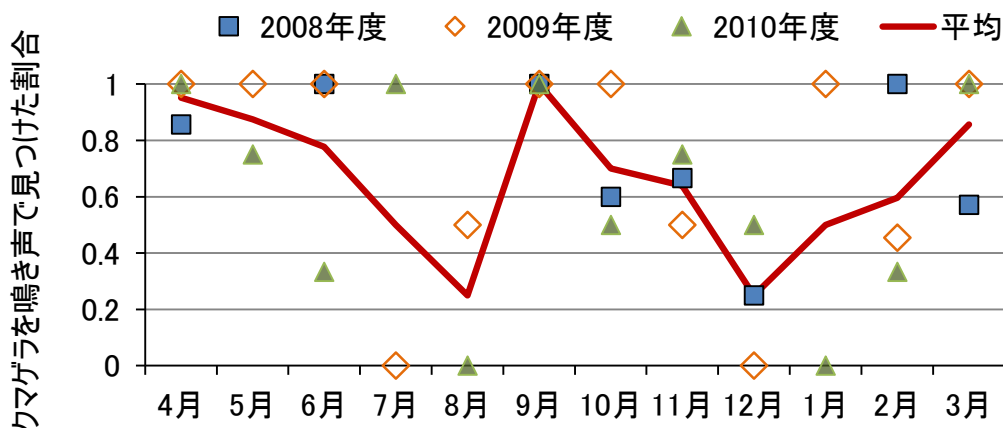


図-2 クマゲラを鳴き声で見つけた割合の推移
クマゲラが発見されなかった月は除く

間接的なクマゲラの生息情報（採餌痕、営巣木、ねぐら木）

このように生息地といえども、クマゲラは簡単には見つかりません。しかし、キツツキであるクマゲラは樹木に特徴的なつつき痕を残すため、間接的にもクマゲラの生息状況を知ることができます。クマゲラは、

冬期に樹木内部で越冬するアリを食べるため樹木の幹の低い位置に特徴的な縦長で深い穴（以下、採餌痕）を掘ります（写真-2 a）。また、営巣や夜の休息場所であるねぐらとして利用するため太い樹木に樹洞をあけます。他のキツツキが掘った樹洞の入り口は丸ですが、クマゲラの掘った樹洞の入り口は縦長の楕円形で、大きさは縦9～17cm×横7～13cm程度で他のキツツキよりずっと大きくなります。ときに楕円の下部が平らになって、三角形のような形の場合もあります。このような採餌木や樹洞木は間接的にクマゲラ生息の可能性を示しています。営巣木の場合はトドマツやカンバなど通直で樹皮のなめらかな樹種が選ばれ、胸高直径は約40cm以上、樹洞入口の下部に枝がない樹木で、入口は1つのときが多いといった特徴があります（写真-2 b, c）。ねぐら木の場合は、樹幹内部が空洞になりやすいシナノキやアズキナシといった樹種が選ばれ、入口が写真-2 dのように複数あります。

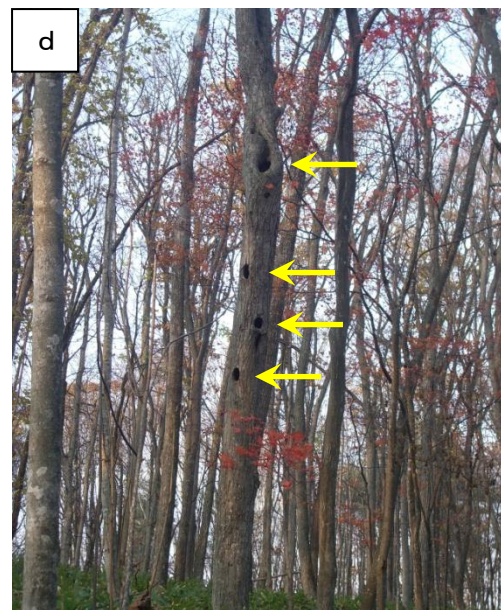


写真-2 クマゲラの生息を示す痕跡

a : 採餌木 (カラマツ), b : 営巣木 (チョウセンヤマナラシ), c : 営巣木 (トドマツ),
d : ねぐら木 (アズキナシ)。矢印は樹洞の入口を示す。

写真-2aのような特徴的な採餌痕は晩秋から冬にしか残さないため、新しい採餌痕は冬のクマゲラの生息地を示しています。クマゲラは冬には行動圏が大きくなるので、その場所が営巣地に近いとは限りませんが、営巣地を探す場合の手がかりとなります。また、営巣木やねぐら木が見つければ、その利用状況を調べることで生息や繁殖の確認ができます。利用がない場合でも生息の可能性の高い地域と考えられるでしょう。反対に採餌木や営巣木等が見つからない場所では生息や繁殖している可能性はかなり低くなると推測されます。

森林施業との共存に関して

北海道森林管理局は、2006年にクマゲラの保全を考慮してクマゲラ生息森林の取扱い方針を作成しました。取扱い方針の主要部は、営巣木が見つかった場合の対処方法です。営巣木周辺では、施業条件の規制を厳しくし、かつ繁殖期に施業を行わないとしています。営巣木からの距離が離れるに従って施業の規制を緩くしています。クマゲラのように生息密度が低く、広い行動圏をもつ動物は、生息地においても短時間の調査では発見できないことが多くなります。生息確認以上に営巣木の探索には労力と時間がかかるので、これまで述べたクマゲラの生息確認に及ぼす季節性に配慮することで、より効率的な確認が可能になると考えられます。

森林管理にも生物多様性に対する配慮を求められる昨今、日頃から希少種などの情報を集めることは重要です。特に森林認証では、希少種の保全策の策定やモニタリングが求められています。クマゲラの場合は姿が見えなくても、上記の間接的な方法、つまり、採餌痕や営巣木・ねぐら木が最初の手がかりとなります。生息数を維持する上で、野生動物にとっては繁殖地を保全することが重要です。鳥類の場合、巣に卵を産み、しばらくその場所を動けない時期が生じるため、巣周辺の生息環境が最も重要な保全事項の1つになります。前述の森林管理局の指針もこの点に重点をおいて作成されています。しかし、営巣木探索にはとても労力がかかり、すべての営巣木を把握することは現実的に不可能です。そこで、日頃から情報を収集しておき、ある程度の生息状況を把握することによって、営巣木がわからなくても対処できる方法を考えることが重要だと考えています。伐採を伴う森林施業は森林環境を大きく改変するため、森林に生息する野生生物に少なからず影響を与えます。クマゲラをよく見かけ、繁殖の可能性がありそうな地域においては、まずは繁殖期(4月～7月)に伐採を伴う施業は控えることで伐採の影響を最小限にできるでしょう。クマゲラの生息情報から繁殖の可能性のありそうな地域を抽出する簡便な方法は、残念ですが今後の課題です。

クマゲラはほかのキツツキと異なり営巣木を複数年続けて使うことが知られていますが、数年で営巣木を変えます。これまで報告されている例では、営巣木の移動は28～490mです。森林施業との共存を考えた場合、理想的には営巣木を把握し、営巣木の移動に合わせて伐採を伴う作業場所を移動していくのがよいでしょう。しかし、現実的には難しいので、巣を移動できるような環境を維持しながら木材生産ができれば良いと考えています。このような考え方は人工林での繁殖可能性がある希少猛禽類のオオタカやハイタカにも当てはまります。戦後の拡大造林時に植栽された人工林が大きくなるにつれて、原生林ではなくとも、人工林内にクマゲラやオオタカが営巣しています。写真-2の2本のクマゲラの営巣木は、それぞれカラマツ人工林(写真-2b)とトドマツ人工林(写真-2c)の中にあいました。今後、繁殖地の環境要件を解明し、地域全体で個体数を維持するような環境を維持しながら施業をしていくことができれば、森林施業との共存が可能であると考えています。

(森林資源部保護グループ)